

ケータイ使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響

-学校満足度の高低群による多母集団同時分析-

○安藤玲子(お茶の水女子大学), 高比良美詠子(メディア教育開発センター), 坂元章(お茶の水女子大学)

キーワード: ケータイ使用, 孤独感, ソーシャルサポート, 中学生, 因果関係

問題の背景

子どもの生活への携帯電話・PHS (以後、ケータイ) の急速な普及に伴い、ケータイが子どもの対人関係や心理的側面に与える影響についての関心が高まっている。

ケータイのコミュニケーション機能は、大きく分けて通話、メール (以後、ケータイメール)、インターネット (以後、ケータイネット) の3つに分類できる。

ケータイの通話は、基本的に直接持ち主にかかるという前提があるため、家族などが出る可能性のある固定電話と比べ、気遣いが少なく済む。しかし、携帯メールよりも相手を束縛するので、悩み事などの深刻な話や、親しい友だちとの間で好まれる機能だという(辻・三上, 2001)。

ケータイメールは、最も使用頻度が高いとされる機能で、対面で言い難いことも気軽に伝達でき、お互いの体験や感情を共有する機会が増えるため、既存の交友関係を深めると同時に、関係の初期段階でのコミュニケーションを促進するという(中村, 2001; 辻・三上, 2001)。

ケータイネットは、機器のスペック向上に伴い、若年層を中心に急速に普及が進んでおり、最近では、パソコンでのネット使用と同様にコミュニケーション目的の利用が多くなってきている。そのため、ケータイネットのBBSやチャットルーム、SNS、ブログなどを介して知り合った友だち(以後、ネット友人)との交流などが増えていると考えられる。

このように、ケータイのコミュニケーション機能は、子どもの交友関係の維持や拡大、そして精神的健康に有効と考えられるが、子どもを対象としたケータイ研究は、意識調査などが主で、実証的な研究としては、安藤ら (2006) のパネル研究などがいくつか報告されている段階である。

安藤ら (2006) は、ケータイの使用が、中学生の友人関係の孤独感やソーシャルサポートに与える影響を検討した。その結果、通話、ケータイメール、ケータイネットの使用がどれも、友人関係の孤独感を下げ、対面で知り合った友人 (以後、オフの友人) からのソーシャルサポートを増やすこと、また、ケータイネットはネット友人からのソーシャルサポートも増やすことを示した。しかし、この研究では、ケータイの有効利用を考える上で必要な、このような効果がより顕著になる要因についての検討を行っていない。

そこで、本研究では、ケータイ使用が友人関係の孤独感やソーシャルサポートに与える効果について、学校満足度を調整変数として検討を行った。ここで、学校満足度を調整変数としたのは、社会的ネットワークが小さい中学生にとって、学校は家庭と並ぶ重要な社会的集団であり、学校で自分がどの程度認められているかを査定する学校満足度は、対人行動に大きく関わると考えられたからである。

方法

調査対象

神奈川県内の公立中学校 2 校の生徒を対象に 5 ヶ月のインターバルで2波のパネル調査を実施し、298 名(男子 155 名、女子 143 名)を分析対象とした。

調査項目

ケータイ使用量 ①通話、②メール、③ネットの用途でのケータイ使用について、1週間あたりの総使用時間を「やっていない」から「3時間以上」の7件法で尋ねた。

友人関係の孤独感 広沢・田中 (1984) の「異なった関係における孤独感尺度」の友人関係因子 10 項目について、4件法で尋ねた。 α 係数は両時点ともに.80であった。

ソーシャルサポート 久田ら (1989) の「学生用ソーシャルサポート尺度」から中学生が経験すると考えられる 13 項目を選び、道具的サポートの項目を 2 項目追加して、それぞれについて「ネット友人、オフの友人」から受けたサポート経験の頻度を 4 件法で尋ねた。

学校満足度 河村(1999)の「学校生活満足度尺度」から、自分の存在や行動が級友や教師から承認されているか否かを測定する「承認」因子 10 項目について 4 件法で尋ねた。 α 係数は 1 時点目(T1)が.81、2 時点目(T2)が.84 であった。

結果

因果関係の分析方法

分析モデル パネルデータから 2 変数間の因果関係を推定するのに適した交差遅れ効果モデル (Fig.1) (Finkel, 1995) を分析モデルとして、構造方程式モデリングで分析した。

Table 1 ケータイ使用から友人関係の孤独感への影響

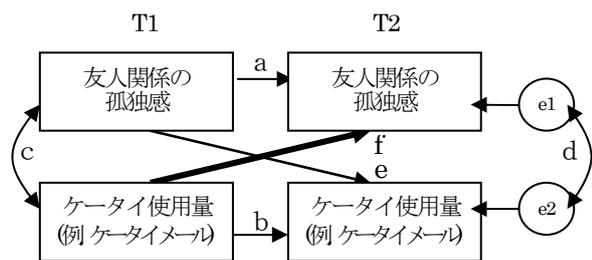


Fig.1. 交差遅れ効果モデル

分析モデルの選択 学校満足度の高低群での多母集団比較を行うため、Fig.1 のパス a～f までの 6 本のパスが、学校満足度の高低群で全て等しいと仮定したモデル 1 から、全てのパスが異なると仮定した飽和モデルのモデル 10 までを検討し、適合度指標を参考に、最終モデルを採択した。

因果関係

ケータイ使用量が友人関係の孤独感に与える影響

Fig. 1 のモデルを多母集団同時分析した結果、学校満足度の低い群でのみ、1 週間のケータイ使用全体、通話、ケータイメール、ケータイネットの使用量が多いほど友人関係の孤独感が下がるという効果が見られた (Table 1)。

ケータイ使用量がソーシャルサポートに与える影響

次に、ケータイ使用が友人からのソーシャルサポートに与える影響について検討した。

ネット友人のソーシャルサポートへの影響 Table 2 のように、ケータイネットの使用量が多いほどネット友人からのソーシャルサポートが増加するという効果が示されたが、学校満足度の高低による違いは見られなかった。

オフの友人のソーシャルサポートへの影響 Table 2 のように、ケータイの通話の効果には学校満足度の高低による違いはなかったが、ケータイメールとケータイネットに関しては、学校満足度の低い群でのみ、1 週間の使用量が多いほどオフの友人からのソーシャルサポートが増加していた。

考察

本研究では、中学生の友人関係の孤独感とソーシャルサポートへのケータイ使用の効果について、学校満足度を調整変数として検討した。その結果、従来の研究で指摘されていた友人関係の孤独感とソーシャルサポートへの効果 (安藤ら, 2006) の多くが、主に学校満足度の低い中学生で示されることが明らかになった。

したがって、学校であまり認められていないと感じている生徒にとって、ケータイのコミュニケーション機能を駆使してオフの友だちと頻りに連絡を取り合うことは、オフ

		友人関係の孤独感
		パス f
ケータイ使用全体	学校満足度高群	
	学校満足度低群	-0.20**
通話	学校満足度高群	
	学校満足度低群	-0.13*
携帯メール	学校満足度高群	
	学校満足度低群	-0.20**
携帯ネット	学校満足度高群	
	学校満足度低群	-0.13*

注1: 有意な効果がみられた標準化βのみ示した。***p<.001, **p<.01, *p<.05.

Table 2 ケータイ使用からソーシャルサポートへの影響

		ソーシャルサポート	
		ネット	オフの友人
		パス f	
ケータイ使用全体	学校満足度高群		
	学校満足度低群		.26***
通話	学校満足度高群		.12**
	学校満足度低群		.17**
携帯メール	学校満足度高群		
	学校満足度低群		.25***
携帯ネット	学校満足度高群	.14**	
	学校満足度低群	.13**	.20**

注1: 有意な効果がみられた標準化βのみ示した。***p<.001, **p<.01

の友人との関係を深めてソーシャルサポートを引き出し、孤独感を低減させることに貢献していると言えそうである。

この結果は、学校や家庭においてむやみにケータイ使用を禁止したり制限したりせず、その有効な利用法を考える上での一つの示唆となるかもしれない。

また、このような生徒は、関係を深めるために、相手に合わせてケータイツールを使い分けている可能性がある。例えば、軽い話などは相手の都合を妨げないケータイメールを使い、通話の前には事前にケータイメールで都合を確認するなどである(辻・三上, 2001)。もしも、このように相手に気を遣いながらケータイを使っているならば、ケータイ使用は、学校満足度の低い生徒の対人スキルの育成にも貢献する可能性がある。今後の検討課題の一つであろう。

引用文献

- 1) 辻 大介・三上俊治「大学生における携帯メール利用と友人関係」第18回情報通信学会大会 個人研究発表 配付資料 (2001)
- 2) 中内 功「携帯メールの人間関係」東京大学社会情報研究所 (編)『日本人の情報行動2000』東京大学出版

安藤玲子・高比良美詠子・坂元章 (2007,9) ケータイ使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響- 学校満足度の高低群による多母集団同時分析-日本社会心理学会第 48 回大会 (早稲田大学) 発表論文集, 716-717.

会, (2001), Pp.285-303.